

やくわえ



No.114

令和8年3月1日発行
東京都神道青年会

表紙写真
令和7年8月15日
都内戦災震災殉難者慰霊祭

会長 挨拶



東京都神道青年会
会長 服部 佑子

皇紀二千六百八十六年、令和八年丙午の年を迎え、謹んで聖寿の万歳と皇室の弥栄を言祝ぎ奉り、国家の安寧と、併せて神宮はじめ各ご社頭のご隆昌、会員、関係者のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

また第六十三回神宮式年遷宮の諸祭が恙なく斎行されており、誠に慶賀の至りであります。昨年は大東亜戦争終結より八十年の節目の年でした。例年斎行している八月十五日の都内戦災震災殉難者慰霊祭の前には、靖國神社様にご協力頂き、戦争体験者の方から直接お話を聞く機会を設けたく教養講座を開催しました。今の

時代、スマホ一つで様々なことを調べることができますが、生の声を聴ける大変貴重な時間となりました。終戦記念の日である八月十五日には、毎年恒例となっております東京都慰霊堂での慰霊祭の後、靖國神社を参拝し、御神前にて祭文を読ませて頂き、明治維新より大東亜戦争まで「国安かれ」という一念のもと、国を守るために尊い命を捧げられた御霊達のお陰で今日の私達があると感謝の言葉述べ、今後も正しい歴史観を後世に伝えるべく引き続き慰霊・英霊顕彰に努めていくことをお誓い申し上げます。

十月には、東日本大震災発災より十五年を前に、震災直後から訪れている福島県地へ行ってまいりました。今回、第一原子力発電所内見学の機会も頂き、多くの人が安全第一に復興に向け前に進んでいる姿を目にすることができました。十五年という月日の中で、目に見えて確実に復興への道を歩んでいます。しかしながら、今もお、立ち入り禁止の区域があること、そして日常に戻っても、以前のように人が戻っていないなど、本当の意味で復興したと言える日

まで「忘れない、風化させない」のローガンのもと、引き続き心を寄せていきたいという想いを新たにいたしました。そして、いつどこで起こるか分からない有事に備えるべく、防災意識の向上にも引き続き目を向けてまいりたいと思います。

青年会は、それぞれ各お社でご奉仕している者が、一堂に会し、共に研鑽を積み、交流を深められる場です。青年会活動の期間は限られてはいますが、そこで築いた関係は年齢も期間も関係なく、まさしく一生と言えるでしょう。また青年会だからこそできる経験も多くあると思います。

これまで様々な場面に於いて、「楽しむ」というキーワードをお伝えしてきました。もちろん今を楽しむという意味もありますが、何事も一生懸命に取り組んだ先、一年後、もしかしたら十年後になるかもしれないが、振り返った時に「楽しかった」と思える瞬間や、あの時は、という話ができる「楽しい場」が来るということも信じています。また、AIやデジタル技術が急速に進化する時代だからこそ、人と人とのつながり

をより一層大切にしてまいりたいと考えております。

昨年の四月より会長という大役をお預かりさせて頂いてから、早くも折り返しが見えてくる時期となりました。あつという間という感覚と、もっと多くの月日が経っているような感覚と両方あり、不思議な感じがいたしますが、先輩方がこれまで受け継いできた「昭和」「平成」「令和」と三つの時代を歩んできた当会七十六年の重みを受け止めて、これから先に向かって「今」を大切にしながら、時代に置いてかれぬよう、時には変化を恐れず「次」に向けて突き進んでまいる所存です。

多くの方にお支え頂いていることと感謝いたします。引き続き、会員の皆様方のご協力と積極的なご参加、そして先輩方におかれましてはご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



活動報告

神道行法錬成研修会

七月三日・四日の二日間にわたり神道行法錬成研修会が武蔵御嶽神社御神域に於いて奥野雅司・藏重命弘両道彦、森田義巳・大野裕丈・細野喜久各助彦のご指導のもと、総勢四十一名の参加にて開催された。

初日、開講式また始禊祭の後、「エイホ」の声を響かせながら森厳な綾広の御滝へと向かった。和歌の声も高らかに、参加者一同心を一つにして鳥船をはじめ、一連の行法を行い、順に御滝のお水を頂戴した。鳥船で火照る身体に水の冷たさが一層感じられ、清々しいお水に心身ともに清められた。

夜間講義には、学校教員の経験もある都神社庁神森正理事より青梅市の歴史についてご講話頂いた。講話の中では青梅は街道の宿場町として先に栄え、鉄道（青梅線）の開通後、駅周辺や沿線の宅地化が進んだため、線路側の発展は後から進む形となったことや、西多摩地域の神社については殆どの方が兼業神職として生計を成り立た

せていることが説明された。

二日目、早朝より御滝にて禊行を行った。その後、御嶽神社へ移動し正式参拝にて錬成が終了したことを奉告申し上げた。続いて終禊祭・閉講式と進み、直会では参加者相互の親睦を深めた。充実感と達成感を胸に、無事に下山し研修会を終えた。

神職として、日々神明奉仕に励むための心構えを再確認することができた。

(立野直嗣)



なつやすみ子供神社体験学習

七月二十二日・二十三日の両日、「第二十五回なつやすみ子供神社体験学習」を明治神宮の御神域にて開催した。

今年のテーマは「自然く神様の恵みをいただいで〜とし、いのちを支える恵みに気づいてもらい、感謝を形にする二日間とした。

初日は集合時刻を午後とし、白衣着装・記念写真の後開講式を行い、作法を学んでから御社殿へ参拝した。暑さのピークを過ぎた時間帯に、習ったばかりの作法で白衣のままお参りできたことは、子どもたちにとって印象深い体験となったことだろう。作法の時間には神社の装束、とりわけ衣冠を階級ごとに紹介し、親御さんを対象とした時間に於いても同様に解説を行った。夕刻には夜間参拝を行い、夕闇の中で風の音や鳥の声に耳を澄ませながら心を鎮めた。

二日目は禊と朝拝を行い、心身を整えて一日を始めた。続いて、前日に学んだ内容の理解を深めるクイズラリーに取り組み、楽しみながら学びを確かめた。その後、神青劇団による演劇、雅楽クラブ

による雅楽鑑賞へと続き、最後に正式参拝の後閉講式を迎えた。

なお、暑さ対策を徹底したことで体調不良による途中離脱者を出すことなく、全日程を終えることができた。子どもたちは、明治神宮の杜での二日間を通して自然の息づかいに触れ、神様の恵みを頂いて、生きていることを感じ取ったことだろう。神社での所作や学びを通して芽生えた感謝の心を、それぞれの暮らしの中で大切に育んでくれることを願っている。

(佐和橋義之)



なつ体に参加して



リーダー班
林 胡桃
東京都神社庁
録事補

子供の頃、夏休みの宿泊行事は一大イベントだった。そんな夏の行事が、途中帰宅者を出すことなく無事に終えられたことに安堵している。

今回、私はリーダー班副班長として、子供達と接するリーダー・サブリーダー達を最も近い立場で見守ってきた。特に印象的だったのは、リーダー達の子供達への接し方である。状況に応じて子供目線と大人目線を使い分け、一人ひとりに寄り添った声かけが、子供達の緊張をほぐし、多くの笑顔につながっていたと感じた。

前回に引き続き参加している子もおり、なつ体の子供達にとって良い思い出となっていることを実感した。二日間という短い時間ではあるが、この経験が子供達の糧となることを願っている。



生活班
富田 剛弘
亀戸天神社
権禰宜

猛暑の中、開催された第二十五回なつやすみ子供神社体験学習。我々生活班は、子供たちと直接関わることは少ないが、体調面の管理や物資の準備など裏方として尽力した。

熱中症対策は、昨今の一番の課題となっている。しかし、諸先輩が残していただいた資料により、子供たちも快適に過ごせたと感じている。誰一人欠けることなく全プログラムの行われたことは、一番の成果であろう。

子供たちに神様や神社に興味を持つてもらおうという、体験学習の意義を果たすお手伝いができたなら、嬉しく思う。

今事業が、神社庁や都神青だけではなく神社界全体で繋ぎ、広がりを、続いていくことを切に願う。



プログラム班
猿丸 貴大
湯島天満宮
権禰宜

本年、都神青に入室してすぐ、この事業のプログラム班に配属となった。プログラムの主な役割としては、円滑な全プログラム進行の補助など、子供たちの誘導を行うことである。

特に印象に残ったのは、「紙垂づくり体験」で、子供たちが苦戦しながら活動に取り組んでいたことだ。また、プログラム班が主体となる二日目の「クイズラリー」では、限られた時間の中で円滑に進められ、厳しい暑さではあったが、子供たちの笑顔もたくさん見ることができた。

神道教化が凝縮されたこの二日間、子供たちにとって、日本の伝統文化に触れられた有意義な時間であったことだろう。



記録班
小澤 利弥
富岡八幡宮
権禰宜

初めてのなつやすみ子供神社体験学習を記録班として参加いたしました。

記録班は体験学習において、主にファイナダー越しに子供たちと関わる機会が多いですが、そのような目線だからこそ子供たちの晴れ渡るような笑顔はもろろのこころと、各班が円滑に体験学習を進めていくために試行錯誤し助け合う姿や、子供たちが楽しんで行事に取り込めるよう励む様子もろろかかいい知ることができました。

プログラムの準備を行っている姿を見た子供たちが「ありがとうございます」と言っていたことが印象深く記憶に残っております。

体験学習を通じて、神社への学びと関心を集めることに加えて、大人たちが勤しむ姿を見ることも学びの一つになったことでしょうか。





演劇班
服部 高明
小網神社
権瀬 宜

本格的な稽古は公演のおよそ二週間前から始まり、決して十分とはいえない準備期間ではあったが、出演者一人ひとりが真剣に稽古へ向き合っていた。本番当日も、開演十五分前まで動きや台詞の最終確認を重ね、本番を迎えた。

舞台上に立った瞬間は緊張を覚えたものの、いざ演じ始めると、これまで積み重ねてきた稽古の成果を自然と発揮することができたように感じられた。真剣さの中にも楽しさがあり、演じることそのものを味わいながら舞台上立つことができた。

終演後には、演劇を通して感じたことや気づいたことについて子ども達の間で話が広がり、神様の存在についても、これまで以上に身近に感じられるようになる貴重な学びの機会となれば幸いである。

教養講座

八月八日、靖國神社（大塚海夫宮司）にて「大東亜戦争終結八十年 戦争と平和」と題した教養講座を開催した。神職をはじめ都民青協（大井真二会長）や靖國神社崇敬奉賛会青年部あさなぎの各会員など五十四名が受講した。

本講座は大東亜戦争終結八十年にあたり、歴史を学び「平和」の意味を考え、より深い知見を持つて八月十五日の慰霊祭を斎行することを目的とした。

まず初めに大塚宮司より靖國神社は平和の社であるというご講話を頂いた。その後は、戦争体験者である小嶋皓一先生と久野潤先生（靖國神社崇敬奉賛会理事）をお迎えし、対話形式で当時の体験談や社会状況などについて解説を頂いた。とりわけ、体験者の言葉にどのように耳を傾け、どのように受け止めるかという点において、多くの示唆を得た。取材のあり方次第で体験者の言葉が一方方向に誘導され、戦地に赴いた人々までが否応なく罪に結び付けられかねない。久野先生が体験者のお話を丁寧に引き出される姿に、真実を汲

み取る姿勢の大切さを学び、背景に耳を澄ませたいと感じた。

「私たちが想像する戦争」と「実際に肌で感じた戦争体験」とでは、認識に差異がある。実際に戦争を体験した方々の声を聴く機会は、年々減少している。この体験談を如何に後世に伝えていくかが課題である。「平和」の意味を問い続け、過去と向き合い、歴史を正しく伝えていくことが我々神職の使命であると実感した。



（今井健琉）

都内戦災震災殉難者慰霊祭並びに靖國神社参拝

大東亜戦争終結八十年を迎える八月十五日、墨田区の東京都慰霊堂及び靖國神社にて「東京都慰霊堂都内戦災震災殉難者慰霊祭並びに靖國神社参拝」の事業を実施した。厳しい暑さの中、斎主を佐和橋義之議長が務め、祭員・伶人総勢十三名の奉仕により、都神青会員をはじめ都内神職や神社関係者、遺族など百十名が参列した。

慰霊祭では墨東出身の佐和橋議長の熱い想いが籠った祭詞が堂内に響いた。

慰霊祭終了後はバスにて靖國神社へ移動、終戦八十周年の節目を迎えた境内は例年以上に多くの参拝者が訪れていた。控え室では靖國神社村田信昌権宮司より終戦八十周年に寄せる想いなど貴重なお話を頂戴した。その後、昇殿し服部会長の祭文奏上に続き、玉串拝礼、黙祷を捧げ、英霊の方々に感謝と哀悼の誠を表した。

本事業は、二百四十六万六千余人次の柱のみたまへの追悼とともに、今日の平和が先人たちの犠牲の上に成り立っていることを次世代へ語り継ぐ意義を再確認する良い機会となった。
（富田剛弘）



都内戦災震災殉難者慰霊祭 祭詞

都鳥鳴く武蔵の東 大川西に巡りて近し 彼の災禍を静かに伝へ聳え佇む 此の東京都慰霊堂を嚴の斎庭と被ひ清め
神籬刺し立て招ぎ奉り坐せ奉る大東亜戦争並びに関東大震災を始め 此の帝都東京より戦災震災を受け給ひて神去り
坐しし命等の御前に 祭主 東京都神道青年会議長 佐和橋義之 謹み敬ひて白さく
災禍の様を語り出づと 今なほ生き當時を語る人の言葉に耳を傾け 古き記録を繕きて 帝都の悲しき歴史を顕はし
出づれば

大正十二年九月一日の眞日中に しも邂逅なく俄かに大地震出でぬ 阿奈やと叫ぶ東の間に 家壊れ土裂け山崩れ海
浅せ涛怒りて驚ろ驚ろしきに 倒れた家に玉の緒の命を奪はれ給ひしも多かるべし また地震の災ひにも辛くものが
れて一時は身を安らひしも 迦具土神の火の荒び 二日二夜に及びて大空を紅に染め 逃れむ道なく渡らむ橋なく
親子同胞行方も知れず別れ別れにして逃げ惑へば 左に右に火競ひ起こり荒び狂ひ 加ふるに旋風吹き添ひて紅の焰
見る間に蔓延り 生ながらにして身は焼け 渦まく煙に息も絶え 泣き叫ぶ声さへ立て得ず身失せ給へる御霊も澤に
増しにけり

時は移りて 昭和十六年十二月 外つ国の逼迫に耐へがたく己む無く戦ひの烽を挙ぐ 大君の御楯と護り 敷島の
和島根を固め奉らむと 東京よりも多くの兵士戦地に赴き 海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍の覚悟もて御国と
家族の安寧を念ひ幸福を願ひて都を後に遠く海原を越えて戦地に赴きけり 兵士の勲功も聴て空しく戦況芳しからず
玉碎の覚悟をもて尽くし奉るも花と散り給ひし御霊数知れず 遂には本土にも戦火及ぶに至りぬ

就中 昭和二十年三月十日よりのち 敵軍は銃後を護る民をも狙ひ定むる悪しき業を企て行ひぬる 中にも後の人
東京大空襲と名づく其の三月十日の空襲は 真夜中に轟轟と響くB二十九の巨なる翼の音の下 焼夷弾は絶ゆる事無
く降り注ぎ 米兵が空より撒きし化学油脂火は街を焼き鉄をも溶かし地を這ふ炎は道を塞ぎ空を覆ふ黒煙は息をも奪
ひき 一夜にして十万に及ぶ命失はせ給へり 炎は幾筋にも分かれて街を裂き 逃げ惑ふ人々の足を追ひ進む先をも
封じ 生きながらにして身を焼かれ 或いは人々は水を求め川に飛び込み寒さの折身失せ給へる御霊もまた数多に上
りき 親子同胞行方も知れず別れ別れに逃げ惑ふ中に命を失へる御霊も澤に増しぬるなり
この数多災禍の苦みはしもすずろに思ひやられて哀悲しき極みなりけり

昭和天皇の御製
あら玉の としをむかへて いやますは 民をあはれむ こゝろなりけり
身はいかに なるともいくさ とどめけり ただたふれゆく 民をおもひて
其の大御心を仰ぎ奉りて慰霊の誠を捧げ奉るとして先の戦の終てより八十年過ぎし八月十五日の今日を選び定めて汝
命達の御霊を偲び奉り悲しき御心を慰め奉らむと 東京都神道青年会会長 服部佑子 東京都神社庁庁長 松山文彦
神道政治連盟東京都本部部長 田村康雄を始め 赤心の厚き諸人参来て心協せて御前に御饌御酒種々の味物を献り
奉り千草の花をも供へ奉り御神楽奏でて慰霊祭仕へ奉り當時を偲び奉り禮び奉る状を空つ御霊受け諾ひませと白す
斯く仕へ奉るによりては悶ゆる心を去らしめ安き御霊と成らしめ給ひ 今も今も嚴の御霊は天皇の大御代の御栄を天
翔り国翔り守り幸へ給ひ 天下国内には吹風の騒なく四方の海には立浪の乱れなく敷島の日本の国民の行末誤つ事な
く守り導き給へと謹み敬ひて白す



靖國神社参拝 祭文

この靖國のみやしろに鎮まり坐す、尊き二百四十六万六千余の御神霊の御前に謹み敬い申し上げます。

我國の 為をつくせる人々の 名もむさし野に とむる玉かき

「祖国を平安にする」「平和な国家を建設する」という願いのもと、明治天皇の思し召しにより創建された東京招魂社は「靖國神社」と新たに命名され、今日に至るまで日本人の心の拠り所として篤く敬われております。

日清戦争三十年・日露戦争百二十年・第一次世界大戦百年を迎え、大東亜戦争終結八十年という節目の本年。東京都神道青年会・神道政治連盟東京都本部・東京都神社庁・東京都氏子青年協議会をはじめ関係者等がこの忘れ難き八月十五日と云う日を敬弔の誠を捧げる日と定め、ここに参集いたしました。

私たち東京都神道青年会は、終戦の日「戦没者を追悼し平和を祈念する日」である八月十五日に毎年東京都慰霊堂にて慰霊祭を斎行し、また、先の大戦に関わる地に於いて慰霊祭を斎行して参りました。代々の会長始め会員一同が受け継いでいた追悼と感謝の念を今後も変わらず継承して参ります。

先の大戦後、GHQ主導で形作られた歴史認識は、現在に至るまで多くの人々の意識に影響を与えております。また領土問題をはじめとする外交問題についても未だ解決が見つからず続いていること力不足を申し訳なく思います。

世界的に拡大した新型コロナウイルスにより、生活様式や価値観が著しく変化しました。しかしながら日本を思う気持ちは年齢・性別関係なく日本人の根底に脈々と息づくものであると信じております。

私たちは戦争体験の無い青年神職であります。かくあればこそ、英霊の崇高なる精神を学び、僅かでもその御心に近づく努力を怠ることなく、我國の歴史の真実を正しく伝え、国民等しく御遺徳を顕彰する世の中となる事、御神霊の御前に申し上げると共に、青年神職として神明奉任に努めて参ります。

願わくば、御神霊の御心平穩に國の内外問わず、遍く畏き御神徳をお恵みください。

秋暑し今日のこの時に参集致しました一同、御前に額づき謹んで報恩の誠を捧げ、御神霊の安らかなる事を心より念じ上げ、ここに感謝の誠を捧げ奉ります。

皇紀式千六百八拾五年 令和七年八月十五日

東京都神道青年会 会長 服部 佑子



夏の野外懇親会

八月二十八日、東京プリンスホテル内のピアレストラン「ガーデンアイランド」にて、夏の野外懇親会が開催された。今年も福島神青、神奈川神青をお招きして、総勢五十九名の参加となった。

多くの会員が参加できるよう、本年も都内にて夕方からの開催となった。異常な猛暑が続いた八月ではあったが、当日は猛暑日とはならず、やや涼しさを感じる一方、屋外でのバーベキューならではの熱気も感じる事ができた。参加者それぞれが、心ゆくまでバーベキューを堪能し、近況を語り合いながら、夏の楽しいひとときを過ごすことができた。

改めて対面で懇親を深めることの大切さを実感した事業となった。
(吉井良一)



雅楽練習会

十月六日、雅楽研修会に先立って湯島天満宮社務所をお借りし、雅楽練習会を開催した。当日は二十四名の会員が参加者した。

都神青雅楽クラブの指導のもと、各管分かれて楽器の持ち方や扱い方等、基本から演奏方法まで練習した。限られた時間の中ではあったものの合奏練習まで行うことができ、初心者の方、久しぶりに楽器に触れる方にとって、参加しやすいう有意義な練習会となったことと思う。

まずは気軽に雅楽練習会に参加頂き、より充実した雅楽研修会に繋げて頂ければ幸いです。
(野口真魚)



コラム

コロナ禍、メディアで「バーチャル参拝」が取り上げられたとき、「遥拝との違いは何か」と疑問を抱いたことがある。

遥拝とは、任意の場所で社寺の方角を向き、祈りを捧げる行為をいう。片やバーチャル参拝とは、インターネットやVR技術を使って自宅にいながら参拝や祈祷を疑似体験できるサービスのことだ。一見、両者は全くの別物であるように思えるが、「遠隔地から対象の社寺を参拝する」という目的では一致する。

平成十八年、神社本庁は通知「インターネットに関する神社の尊厳性の護持について」においてバーチャル参拝への見解を示した。インターネットを「極めて利便性の高い、効果的な機能を具へてある」としながらも、神社の信仰面に関わる利用については「尊厳性を損なふ」「却って氏子・崇敬者の信用を失ふことになりかねない」と注意喚起をしている。バーチャル参拝については「社会一般の健全な信仰を害する」行為と断じている。

対する遥拝と、商業的側面もあるインターネットを経由するバーチャル参拝とは、尊厳性の護持という点で大きな違いがあるのだろう。テレビ番組で社殿が映っているも、手を合わせて拝む気にならないのと同じだ。とはいえ、遙か遠く目に見えない神社に対して拝礼するより、画面上とはいえども社殿を直接見て参拝したい、気軽に参拝気分を味わいたいと思うのは人間の真理とも言えよう。

遠くない将来、遥拝の尊厳性とバーチャル参拝の簡便性を止揚したような参拝方法が誕生するだろう。もしかしたら、社殿の写真やイラストに御神札を内包した掛軸のようなものや3Dプリンタ等で手のひらサイズに造形したミニチュアの神殿に内符を入れた、神棚を究極的にデフォルメしたようなコレクション性の高いものが登場するかもしれない。はたまた、思いも寄らぬ遥拝の方法が考案されるかもしれない。

そのとき、それらをどう解釈し、取捨選択するかは将来を担う世代である我々青年神職に課せられた義務なのだ。

雅楽研修会

十月二十日、十一月七日の二日間にわたり、都神社庁研修所並びに都神青の共催による雅楽研修会が、神社庁に於いて開催された。ご指導を都神社庁雅楽講師小野貴嗣先生をはじめ、小野雅楽会より各管三名の先生方から頂いた。

一日目の受講者は二十名。開講式後、各管に分かれ、まず越天楽の唱歌を一から徹底的に見直す基礎稽古から始まった。続いて平調音取・越天楽・五常楽急を中心に稽古に励んだ。

先生からの「他の受講生が演奏している時にも、しっかりと耳を傾け、どのようなかき方をしているのか、またどのような指導がなされているのかを、自身のここのように学ぶことが大切である」との言葉が印象に残った。これは日常のあらゆる事柄にも通じるものであると感じ、自然と背筋が伸びる思いであった。



二日目は二十五名の受講者が参加し、前回研修の復習から始まった。神社庁の御神前への奉納を目標と定め、前回の課題を踏まえつつご指導を頂いた。合奏の練習も重ね、緊張感あふれる中ではあったが、無事に奉納演奏を納めることができた。

研修後には懇親会が催され、講師の先生方にもご参加頂いた。近い距離感の中で、雅楽に関する話題をはじめ、さまざまな会話が飛び交い、大いに盛り上がる有意義な時間となった。(豊田芳亮)



東日本大震災福島県被災地現状視察研修

十月八日・九日、東日本大震災福島県被災地現状視察を行い、十九名が参加した。地震から来年で十五年の節目を迎える前に、実際に現地を見たことがない会員が増える中、改めて現地に赴くことで、自身の目や肌でありのままの姿を感じた。

一日目は、信濃町駅に集合しバスで移動し、浪江町に入って福島神青と合流、昼食場所である「如水」にて食事をとった。

その後、東日本大震災・原子力災害伝承館へ移動した。震災前、震災当時、震災直後のそれぞれの写真や映像等で時系列をたどりながら避難生活や風評被害、そして復興への挑戦までの道のりを見学した。実際に被災した人々の音声が行動が拝見でき、復興に向かって一心に取り組み、前に進むようにしている人々の姿や声を聞き、負けずに進んでいく姿には人の強さを感じる。二階の長い廊下には、被災者自身のとある瞬間を映し出した写真が展示されている。写真から読み取れる光景、説明文を読み取って初めてその場面の真実が読み取

れると、涙を見せる参観者もいた。メディアでは見ることでできない光景があり、それらを忘れてはいけない真実がある。

次に震災遺構浪江町立請戸小学校を見学。広大な海沿いの地に佇む請戸小学校。被災した当時のまま残されている建物がある。一階部分は全て浸水し、壁や天井は剥がれ落ち基礎がむき出しになっており、ここが小学校だった形跡はほとんど残されていない。体育館は床が潰されてへこんでおり、津波の威力を物語っている。約十五年が経つ今、周辺は当時より復興が進んでいるが、まだ復興途中であった。

次に双葉町の八幡神社(八口祭殿)、浪江町の若野神社、初發神社を参拝。震災当時の状況や、現状のお話を頂いた。社殿の修復や、氏子減少の問題、伝統芸能の継承など多くの課題があると田村貴正禰宜は語る。

若野神社は昨年二月にようやく再建され、立派な社殿が建っていた。伝統行事の安波祭りも行われ、震災直後の面影があまりなく、周辺道路、防壁など復興が進んでおり、復興にまた一つ進んでいる

と感じた。また以前、初發神社に植樹をした柵の現状も確認した。夜には福島神青との懇親会を行い、福島神青から感謝の言葉を頂いた。お互いの気の置けない仲間として懇親会を楽しんだ。私たちができることをひとつずつ続けていくべきだと感じた。

二日目は、富岡町の諏訪神社を参拝し、宇佐神幸一宮司に発生時から現在に至るまでのお話を頂いた。そして、今回宇佐神宮司のご配慮により、福島第一原子力発電所の構内視察ができ、同行までして頂いた。

今回の参加者には初めて被災地に行く人も多く、約十五年経ってインフラが整備された地域や、当時の姿のままの建物が残る地域を実際に目にした。復興は進んでいるが、今後何ができるかを検討していく必要がある。

『忘れない、風化させない』のスローガンを後輩に繋ぎ、これからも福島神青と力を合わせ、被災地の復興に協力していきたい。

(毛利勇人)



T S S ヨガ体験会
 十月三十日、都神社庁にてT S S ヨガ体験会が開催され、二十五名が参加した。講師には神職兼ヨガインストラクターの濱川史子先生(秋田県八幡神社宮司)をお招きした。

参加者の多くが未経験であったが、先生が終始笑顔で気さくに受講生に話しかけて下さり、和やかな雰囲気の中に組み込むことができた。先生に合わせて体を動かしていくうちに、日常の疲れや雑念が少しずつ薄れていき、体の内側まで整っていくのが感じられた。ヨガも神道も目に見えないものへの感謝や清らかさを大切にするなど共通点が多く、ヨガの動きは単なる運動ではなく、「祈り」に近いものだと感じた。自分自身と向き合う時間が、神明奉仕をする上で大切であることを受講生は学んだ。

(上田達也)



TSS忘年会

十一月二十七日、新宿「釣船茶屋 ざうお」にてTSS忘年会が開催され、会員・家族合わせて総勢五十名の方が参加した。

昨年に続き、宿泊を伴わない忘年会形式を採用し、店内の生け簀で釣りを楽しめるという特徴を持つ居酒屋を会場として選定した。

服部会長の挨拶に始まり、松岡由里子筆頭相談役の乾杯のご発声をもって開宴となった。釣り船を模した店内では、子どもたちが魚釣りを楽しむ姿が随所に見られ、終始和やかな雰囲気にも包まれていたのがとても印象的であった。岡部佐樹子相談役による中締め音頭により閉宴となり、参加者一同、これから迎える多忙な年末年始に向けて英気を養うひとときとなった。(石倉義浩)



二ユース

むらさき会総会

七月十七日、大國魂神社参集殿に於いて、北多摩神道青年会むらさき会(宮崎仁嗣会長) 定時総会が開催され、当会からは服部会長および渡邊副会長が出席した。

総会では、令和九年に迎える創立六十周年に向け記念事業実行委員会が設立され、各委員会委員長が指名されるとともに、記念式典および諸事業実施への決意が示された。

記念講演では、中小企業診断士であり神奈川県杉山神社神職でもある石井里幸氏より、「神社運営の現代的アプローチ」と題した講演を拝聴した。

講演後の懇親会では、石井講師を交え、多摩地区青年神職との親交を深め、今後の神社護持運営について活発な意見交換が行われた。(猿渡諒)



東西神社人親善野球大会

八月十八日から二十日までの三日間にわたり、東西神社人親善野球大会がほつともつとフィールド神戸に於いて開催された。

東京チーム、神宮チーム、熱田チーム、太宰府・宗像チーム、兵庫チームが参加した。東京の一回戦は熱田チームとあたり初回から点の取り合い、シーソーゲームを制して五対二で東京チームが勝利した。

神宮チームとの決勝戦では、二対二の同点で迎えた最終回、東京チームの黒神容良選手の勝ち越しスリーランホームラン、六対二で勝利。東京チームが前回大会に続き優勝を飾った。

大会を通じて全国から集まった神社人と、野球を通じて親睦を深めることができました。(河野浩治)



神青協夏期セミナー

八月二十一日・二十二日に靖國神社に於いて神青協主催による夏期セミナーが開催された。「いまを生きる」私たちが受け継ぐ先人の「こころ」というテーマのもと、野田安平先生、佐波優子先生、井上和彦先生の三名の講師から講義を受けた。

講義を受け、大東亜戦争終結八十年の節目である本年に、今一度正しい歴史を学び、先人のこころを知った。戦争を後世にきちんと伝えていくことは、直接体験した方が少なくなり、戦後生まれが人口の九割を占める現代において、我々の最大の責務ではないかと強く思った。(田村康晃)



一都七県神職野球大会

九月二十四日、晴天の中、一都七県神職野球大会が大井ふ頭中央海浜公園スポーツの森野球場に於いて開催された。

都神青チームは、初戦の千葉・茨城県神青会連合チームとの試合にて初回から打線に火が付き快勝を収めた。二回戦の栃木・群馬県神青会連合チームとの試合では、相手投手に苦戦しながらも勝利を掴み、昨年覇者の神奈川県神職野球同好会チームとの決勝戦に駒を進めた。

決勝戦の神奈川県チームとの試合では、序盤から壮絶な投手戦となり緊迫した展開となった。迎えた最終回、神奈川県チームの猛攻を受け惨敗を喫した。二年連続準優勝という結果に終わったが、青空のもと皆が笑顔で和気藹々とプレーをし、体を動かすことを通じて親交を深めることができた。

(上田達也)

神青協光舞講習会

小野雅楽会の小野先生をはじめ四人の先生をお迎えし、令和七年度「光舞」講習会が十月二・三日に國學院大學有栖川宮記念ホールにて開催された。受講生は二日間 にわたり、主に慰霊祭で舞う四人舞をご指導頂いた。

令和八年は東日本大震災発災十五年という節目であり、より多くの方が「光舞」に触れることとなる。物故者を思い慰霊の誠を捧げるにあたり、「光舞」の稽古により気を引き締めて努めて参りたい。最後の奉奏に備え休憩中も練習する姿が見られ、会員相互に切磋琢磨している姿がひときわ印象的であった。

(千葉布子)



氏青協教養講座

十一月九日、靖國神社に於いて二十五名の参加のもと、「大東亜戦争終結八十年 祈りと伝承」慰霊の心と平和の尊さ 次世代への伝承について」と題し、都氏青協教養講座が開催された。

初めに正式参拝を行い、英霊に感謝と哀悼の誠を捧げ平和を祈った。続いて野田安平権禰宜より、戦没者追悼、軍楽、戦時中の昭和天皇の御言葉についての講話があり、英霊への祈り、祭りの重要性を改めて考えることができた。

都氏青協会員と共に、次世代への伝承に向けて歩みを進める大事な一日となった。

(渡辺大祐)



一七協親睦フットサル大会

十一月十八日、国立代々木競技場フットサルコートに於いて、一七協親睦フットサル大会が茨城神青の当番で開催された。今回は東京から二チーム総勢十八名で出場した。

一年に一度のフットサル大会で例年疲労困憊となるが、若手が増え、人数も多かつた為、両チームとも最後まで良い試合が行えた。最終戦は東京対決で引き分けに終わり、Bチームは準優勝、Aチームは四位と昨年の最下位から大躍進を遂げた。

その後の懇親会も他単位会との交流が深められ、有意義な大会となった。次回当番は東京なので優勝を目指し多くの都神青会員の参加を募りたい。

(田村仁志)



不易流行

神道政治連盟東京都本部は、都内三十選挙区のうち二十四選挙区で自民党候補を推薦しました。今回、東京の選挙区は自民党が全勝し、結果として推薦候補は全員当選することとなりました。選挙は政党や人物の盛衰を競う場でありませんが、同時に、国民がいま何を望み、何に不安を抱いているのかが映し出される鏡でもあります。とりわけ今回の結果は、信任を得た高市政権が「国を守る」という基本姿勢を掲げ、国民の期待を背負う立場に立ったことを意味すると受け止められます。

もつとも、勝利は安堵ではなく責任の始まりです。掲げた理念が言葉だけで終わるのか、具体的政策として形になるのか。ここから先こそが問われます。さらに言えば、当選者の中には、我々と志を必ずしも同じくしない議員がいることも事実であり、方針が内側から曖昧にされ、いつの間にか別の方向へと流されていく危うさは常にあります。期待すると同時に、見守り、正すべき点は正す。その緊張感を失ってはなりません。

一方で、戦後の枠組みの中で、「変えないこと」があたりかかも正義であるかのように語られてきた空気も、少しずつ揺らぎ始めているように思われます。現実が変わり続ける以上、制度や運用もまた、現実に即して整えていかねばなりません。ところが、変化を拒むところが立場の証明になり、結果として「何もしない政治」が続いてしまえば、国を守る力は静かに削がれていきます。いま求められているのは、理念の看板ではなく、現実に向き合い、必要な手当てを積み重ねていく政治の姿勢でありましょう。

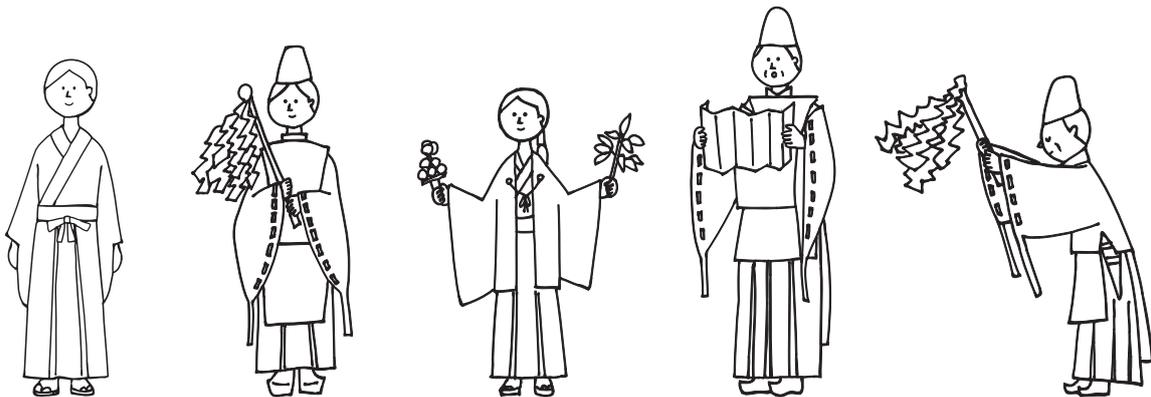
私たち神職にとって、国の根幹とは何かと問われれば、皇統の護持を避けて語ることはできません。また、皇位継承の在り方は、時々的人气や政治的思惑で左右されてよい性質のものではなく、いま連なる継承の流れをゆるがせにしてはなりません。議論が軽く消費され、いつの間にか既定路線として空気が作られていくこと自体が、皇室への敬意を欠く振る舞いになり得ると感じます。

女系天皇容認の議論や、女性天皇を既定路線のように進めようと

する空気が繰り返し現れますが、悠仁親王殿下がいらっしやる中で、これを軽々しく論ずること自体、甚だ不敬であると感じます。皇統は男系をもつて連綿と続いてきた我が国の骨格であり、その維持は「時代に合わせて変える」類の事柄ではありません。そのうえで、現実に即した方策を丁寧積み上げる議論こそが求められます。

また近年、選択的夫婦別氏をはじめ、戸籍制度を揺るがし、家のつながりや親子の連続性を曖昧にしていく議論も強まっています。便利さや耳ざわりのよい言葉で進む制度改変は、一度進めば元には戻りません。家族の一体性、親子の連続性、そして氏のあり方は、暮らしの小さな習慣に見えて、社会の基礎を形づくる大切な柱であります。

「不易」とは、頑なに変化を拒むことではなく、変えてはならない芯を見失わないことです。政治が追うべきは、その時の人気ではなく百年先の国のかたちであり、我々青年神職としても、日々の奉仕の中で、守るべき筋道を静かに言葉にしていくことも大事ではないでしょうか。



神青協御敷地清掃

十二月二日、神青協主催の神宮御敷地清掃奉仕が行われ、都神青より四名が参加した。

神青協内「神宮式年遷宮の“こころ”を守り伝える委員会」の主管により、全国単位会の青年神職や直階、権正階の階位の方々を対象として、遷宮へ向けて尊崇の意識涵養の機会として設けられた事業である。

正午、内宮の参集殿に八十余名に及ぶ参加者が集い、開講式が執り行われた。その後、御垣内参拝と神楽奉納を経て、参集殿に戻り神宮神職より御敷地と遷宮諸祭についての説明を拝聴した。天皇陛下より御遷宮の御聴許を賜り「古殿地」から名を改めた「御敷地」は間もなく遷宮の諸祭儀が始まるため、清掃奉仕であっても立ち入ることができなくなるということで、貴重な機会であることを改めて確認した。

改服ののち、清掃奉仕を行う内宮御敷地へ向かった。参加者は六班に分かれ、各所の落葉や落枝、雑草などを自身の手で丁寧に拾い集めた。参加者は敷地内中央の心



御柱を間近にして、八年後の正殿を想像し、改めて身が引き締まる思いを感じているようであった。我々が奉仕した御敷地内も何日か後には前と同じ様子に戻るかもしれないが、この経験や関心を周りへ伝えていくことで、新たな奉仕の輪が広がることを願っている。そしてその積み重ねが、愈々遷宮を迎える我々国民の「こころ」を育んでくれることを期待している。

(石川勝弥)

【新入会員紹介】

- | | | |
|------|----------|--------|
| 千代田区 | 奥津 和 | 日枝神社 |
| | セレスト ハルト | 日枝神社 |
| | 大和久 直紀 | 靖國神社 |
| | 清水 雅治 | 靖國神社 |
| 中央区 | | |
| | 佐藤 広基 | 小網神社 |
| 文京区 | | |
| | 遠藤 恵太 | 湯島天満宮 |
| 港区 | | |
| | 井口 智博 | 東京都神社庁 |
| | 林 胡桃 | 東京都神社庁 |
| | 松崎 晋彦 | 乃木神社 |
| | 岩脇 天飛 | 赤坂氷川神社 |
| | 齋藤 圭 | 御田八幡神社 |
| 渋谷区 | | |
| | 眞野 伸也 | 東郷神社 |
| | 石黒 恵幸 | 明治神宮 |
| | 朝田 慎之介 | 明治神宮 |
| 杉並区 | | |
| | 人見 共祐 | 井草八幡宮 |
| 品川区 | | |
| | 福岡 晴子 | 三谷八幡神社 |
| | 大竹 秀興 | 三谷八幡神社 |
| | 大野 雅道 | 鹿嶋神社 |
| 世田谷区 | | |
| | 小澤 湧哉 | 松陰神社 |



【会員結婚情報】

- | | | |
|--------|--------------|--------|
| 墨田区 | 前田 友輝 | 牛嶋神社 |
| 江東区 | 根本 吉之助 | 富岡八幡宮 |
| | 水野 佑哉 | 富岡八幡宮 |
| | 石川 慈人 | 亀戸天神社 |
| 新宿区 | | |
| | 戸田 泰仁 | 六八幡宮 |
| 板橋区 | | |
| | 大野 史久 | 徳丸北野神社 |
| 西多摩 | | |
| | 野口 真魚 | 熊川神社 |
| 港区 | | |
| | 神谷 英作氏・日向子さん | 乃木神社 |
| ○九月六日 | | |
| | 相澤 成彦氏・絢香さん | 明治神宮 |
| ○十月十三日 | | |
| | 上田 達也氏・萌乃さん | 江戸天神社 |
| ○十一月十日 | | |
| | 品川 翼氏・明日香さん | 新田神社 |



都神青の主な活動と予定

一月二十日 大寒禊錬成研修会

明治神宮

《関係諸団体の活動と予定》
三月 一日 都氏青協日帰り旅行

二三日 役員会⑨WEB会議

足利伊勢神社・群馬方面

二八日 新年会 神田神社

二月十一日 建国記念の日

奉祝パレード

十一月 一七協

二四日 役員会⑩・連絡会④

明治神宮
都神社庁

東日本大震災発災十五年物故者慰霊祭並びに早期復興祈願祭
大洗海岸

二六日 祭祀舞研修会

都神社庁

二四・二五日

神青協 中央研修会
ホテル日航奈良

三月 八日 献血奉仕活動

湯島天満宮

二五・二六日

一七協 研修旅行
奈良方面

十八日 役員会⑪ 都神社庁

十九日 教養講座②石川酒造

四月 七日

神青協
能登半島地震復興
支援活動 石川県

二十日 定時総会 都神社庁

二八日 主権回復記念日

二三日

神青協 定例総会
本社本庁

七月 初旬 靖國神社参拝
神道行法錬成研修会

二二・二三日

五月三十・三十一日 都氏青協
第六三回

なつやすみ子供神社
体験学習 明治神宮

第六三回

神宮式年遷宮お木曳
行事 神宮

八月 二日

神宮式年遷宮お木曳
行事「川曳」奉仕

六月 九日

一七協 総会
浅草ビューホテル
氏青協定時総会
明治記念館

神宮

神宮



編集後記

▼核武装の検討と自衛隊の国防軍
化。これらは日本の防衛力を根底
から強化し、自立した安全保障体
制を確立するものだ。憲法改正を
含む重要課題に対し、今すぐ具体
的な行動へ移らねば、周辺の国々
の核脅威から国民を守り抜くこと
は不可能だ。(賀)

▼このたび、初めて会報の校正を
奉仕いたしました。不慣れゆえ至
らぬ点もあつたかと存じますが、
一字一句を大切に整える思いで、
心を込めて取り組みました。誌面
を通して社社の思いや歩みが正し
く伝わることを願いつつ、今後も
神明奉仕の一端を担う自覚を胸に、
より良い会報づくりに努めてまい
ります。(浩)

▼広報部に配属され、今回が初め
での編集後記となる。校正作業を
通して、現場の青年神職が社会情
勢に敏感で、社社の奉仕に励みな
がら社会との関わりを模索してい
ることを強く感じた。一方で、私
は生成AIのような新しい技術に
社社がどう適応していくのかを考
えつつ、壊れた家のWiFiの
直し方はいまだ分からないまま

いる。(佳)

▼「いつまでも若々しくあり続け
たい！」そんな思いから本格的に
スキンケアに取り組むこと早一年
と半年。最近、「日本化粧品検
定一級」にも合格してしまいまし
た……。これから目指すは、社社
界の美容男子東京代表!?(孝)
▼コロナ禍も去り、女性初の総理
誕生や日経平均株価の最高値更新
など日本は盛り上がりを見せてい
ます。それに伴い社社界もまます
す盛り上がるようにより一層の精
進を重ねていく所存です。

まずは健康になるためダイエツ
トから……。 (宇)

▼子供が産まれて早二年。最近
は歌を歌ったり、絵本をたくさん読
んでいます。この前までは、あんな
に小さかったのに。子供の成長の
早さに驚かされています。毎日の
何気ない仕草にも、新しい発見と
喜びを感じる日々です。(山)

部・クラブ・同好会紹介

野球部

募集！初心者大歓迎！

〈連絡先〉
濱中 貴文
大鷲神社権禰宜
03-3858-1132
昭和31年発足

雅楽クラブ

雅楽を楽しみたい方大歓迎

〈連絡先〉
香取 正彦
香取神社禰宜
03-3684-2813
平成13年発足

釣りクラブ

釣果を気にする必要なし
打ち上げからの参加も歓迎！

〈連絡先〉
本橋 知子
馬橋稲荷神社権禰宜
03-3311-8588
平成8年発足

フットサル同好会

初心者大歓迎！

〈連絡先〉
田村 仁志
大宮八幡宮権禰宜
03-3311-0105
平成17年発足

演劇同好会

参加者熱烈募集中！

〈連絡先〉
関 龍太郎
八幡神社禰宜
tss.geki@gmail.com
平成23年発足

東京都神道青年会
東京都港区元赤坂二―一―三
東京都社庁内
電話三四〇四―六五二五(代)

表紙題字
第三代東京都社庁長
大鳥居吾朗先生